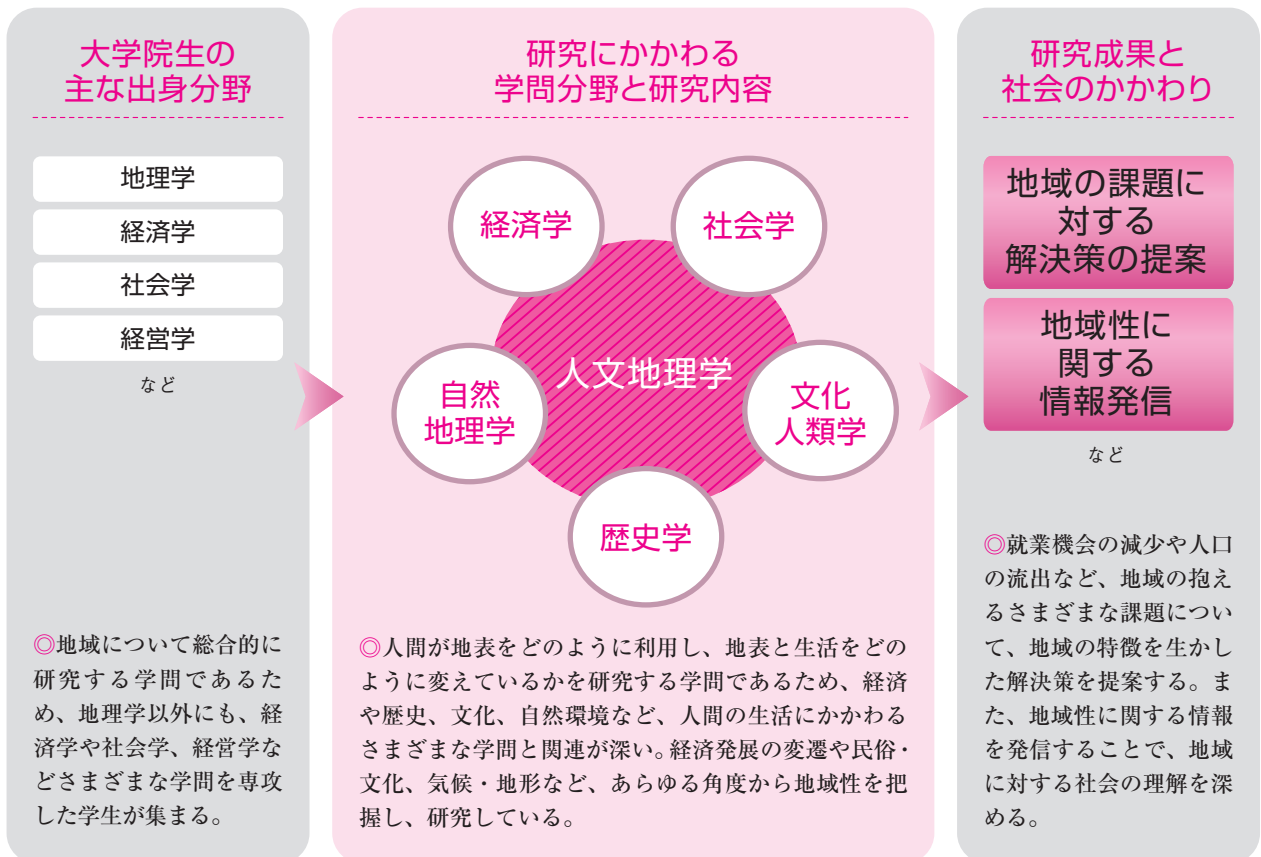


地域の変化とその要因を分析し 過疎化などの課題の解決策を探る

広島大大学院 文学研究科 岡橋^{ひでのり}秀典研究室

交通網が整備され、生活が便利になり、人々が転入することで、人口が増えて繁栄していく地域もあれば、就業機会が減り、職を求めて人々が出ていき、衰退していく地域もある。人文地理学は、こうした変化について地理学の観点から把握し、要因を分析する学問である。その知見は、変化によって生じる課題を解決する武器ともなる。人文地理学の第一人者、広島大大学院文学研究科の岡橋秀典教授に、日本の過疎農山村や、急速な経済発展を続けるインド諸地域が抱える課題と解決策について聞いた。

フローチャートで分かる岡橋秀典研究室



何事にも興味を持ち、観察し続ける力が必要

人文地理学が求める学生像

幅広い知的好奇心

根気よく調査する力

学際的な広い視野

人文地理学では、人間、文化、社会、経済などの様子を、地理学の観点で研究していきます。気候や地形といった自然環境だけでなく、集落が都市とどの程度離れているか、住民がゴミをどこにどのように捨てているかなど、人間の営みと地理との関係に興味を持って観察することが大切です。

根気よく現地調査に取り組む力も、欠かせません。一口に都市や農村といっても、土地をどのように利用しているか、住民が何に課題を感じているかなど、人間の生活の実態は地域によって異なります。地域の特徴はすぐには見えてきませんから、繰り返し現地に足を運び、調査し続ける必要があります。

また、地域の特徴を把握するだけでなく、その特徴がなぜ見られるかを分析し、今後どのように変わっていくかなどを推測することも研究の1つです。そのためには、文化や経済、政治、歴史など、人間の営みに関するさまざまな学問の知見も積極的に身に付けなければなりません。学問領域にとらわれない、広い視野が求められるのです。

高校生へのメッセージ

高校時代は、心身共に大きく成長する時期です。たくさん本を読み、視野を広げることが大切ですが、ただ本を読むだけでは、十分に理解できないこともあります。そこで、興味があることを実際に行ったり、気になる場所に直接足を運んだりして、体験することを心掛けましょう。具体的な知識が得られ、気付きも多くなると思います。



岡橋秀典 教授

おかはし・ひでのり 広島大学院文学研究科教授。広島大学総合博物館長。広島大学院博士課程教育リデザインプログラム「たおやかで平和な共生社会創生プログラム」プログラムコーディネーター。名古屋大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。九州大助手などを経て、現職。2007年、日本地理学会賞（優秀賞）を受賞。主な著書に「周辺地域の存立構造―現代山村の形成と展開」（大明堂）など。

研究を志したきっかけ

生まれ育った地域が大きく変わる様子を目の当たりにした

人間は古来から、田畑を切り開き、住まいをつくり、都市を築くというように、地表に絶えず手を加えてきました。地表の様子が変われば、

そこで生活する人々にも、移住や転職などの変化が生じます。人文地理学は、人間の営みによって地表と人間の生活がどのような影響を受けるのかについて研究する学問です。

1960年代、高度経済成長期の日本では、都市化が急速に進み、私が生まれ育った奈良県の郊外にも、その波が押し寄せました。小学生の頃は見渡す限りの田園地帯でしたが、中学生の頃には大規模な団地が造られ、高校生の頃には高速道路が建設されたのです。都市部に通勤する住民が増えたことで、地域の気質も変わっていききました。

自分の住む地域が大きく変わっていく様子を目の当たりにした私は、それがなぜ生じるのか、故郷がこれからのように変化するのに関心を抱きました。そこで、大学で人文地

研究概要

農山村を調査する要因を 衰退が生じる分析する

理学を専攻することにしたのです。私の研究には、柱が2つあります。1つめの柱は、日本の過疎農山村の研究です。自身が農村出身であることに加え、都市化という「発展」

の方向だけでなく、過疎化という「衰退」の方向への変化の仕組みを解明したいと思ったことがきっかけで、学部時代から取り組んでいます。

60年代末から70年代には、農山村に工場を建設する企業が増えました。村に新たな雇用の場をつくることで、人口流出を防ぎたいと、工場を積極的に誘致する農山村が目立つようになりました。いわば、工場による村おこしです。

これが人口流出の効果的な対策になっていくかどうかを検証するため、私は各地の農山村を訪れ、工場の経営者に製造品目や雇用条件などの聞き取り調査をしました。すると、大半の工場では、労働者の技術レベルが低く、低賃金でした。そのためか、若者はほとんど働いておらず、中高

*プロフィールは2014年3月時点のものです

齢者の雇用の場となっていたのです。工場には農山村の中高齢者の流出を防ぐ機能はありましたが、若者を地域にとどめられていませんでした。工場誘致は、根本的な過疎化防止策になっっていなかったのです。

私は、他の手立てを講じる必要があると考えました。工場以外に目を向けて調査を続けると、特産品の販売や観光など、地域の特性を生かした産業を興して、若者の流出を防いでいる農山村がありました。私はこうした手法を全国に紹介しながら、過疎農山村のそれぞれの地域性に合った活性化策を提案しています。

研究の2つめの柱は、現代インドの地域研究です。インド研究に力を入れていた本学に赴任したのを契機に、取り組むようになりました。インドは91年に経済自由化政策を打ち出してから、多くの地域で都市化や住宅地化、工業地帯化が急激に進んでいます。経済的な発展に伴い、地域がどのように変わっていくのかを、ほぼ毎年、現地を訪れ、調査しています。

研究は、複数の研究者とチームを組み、大都市や工業地帯などあらゆる

地域を対象に進めています。私が関心があるのは、やはり発展から取り残され衰退しつつある農山村です。農民への聞き取り調査などにより、農山村にどのような課題があるかを把握することに努めています。

インドには、電気もガスも通っていない貧しい農山村が点在していますが、どの村も人口が多く、人口流出が日本ほど多くありません。それは、都市部にも労働力が余っているからです。同じ理由で、農山村には工場がほとんど造られていません。日本の農山村では都市から進出した工場が中高齢者の働く場になりましたが、インドの農山村ではそれすらも期待できないのです。

だからこそ、インドの農山村では内発的な対策を行うことが急務だと考えます。ただ、地域に適した産業を興そうとしても、現在のように電力が手に入らない状態ではうまくいかないでしょう。そこでは、エネルギー問題を解決することが、復興への第一歩となるはずです。すぐに国策で行うのは難しいので、まずは水力発電や太陽光発電によって、村のエネルギーを自給できるようにする

必要があると、私は考えています。

研究の成果と展望 インドの農山村を 発展させるための 具体策を提案したい

日本では、工場誘致などの外的な要因に頼っていた農山村の多くは、過疎化に歯止めが掛からず、衰退の一途をたどりま

した。一方、地域の特性を生かした対策を講じた農山村の中には、人口が回復しているケースも見られます。過疎化に悩む農山村が参考にできる事例はたくさんあるのです。

インドは、日本の重要な貿易相手国の1つです。インドの経済政策が地域をどのように変えているのかを分析すれば、日本が行うべき支援も明らかになるはずです。

広島大学院では、アジア諸国の経済的に貧しい地域を発展させるための具体策を研究しようと、博士課程教育リーダーングプログラム「たおやかで平和な共生社会創生プログラム」を始めました。インドの農山村について、有効な活性化策を提案できる人材を、今後育成していきたいと考えています。

用語解説

1 過疎農山村

人口が流出し、少なくなった農山村。

2 経済自由化政策

多くの産業を公営企業に担わせ、主な価格も統制していた経済から、産業への民間企業の参入、関税の引き下げなど、市場原理と競争重視へと転換を図った政策。

3 福建省の内陸農村

福建省の中でも、海に面していない地域にある農村で、出稼ぎが多い。

労働力の流出を防ぎ 農村を繁栄させたい



陳林さん

ちん・りん 2013年1月、広島大大学院文学研究科博士課程後期修了。福建省建甌市第二高校卒業。14年2月、広島大大学院博士課程教育リレーディングプログラム「たおやかで平和な共生社会創生プログラム」特任助教に就任。

Q なぜこの分野に進んだのですか

A 私は、中国の南東部に位置する福建省の内陸農村に生まれ育ちました。家業は農業ではありませんでしたが、友だちは農家の子どもばかりでした。他省の大学に進み、寮生活を送るようになると、私は長期休業の度に帰省し、幼なじみと遊ぶのを楽しみにしていました。しかし、大学に進学せず、家業の農業を継いでいた友だちは、1人また1人と、故郷を離れ、都市に仕事を

求めて行きました。

若者が都市に流出してしまう農村があることは、高校の地理の授業で勉強していました。高校時代は「そういうことがあるんだ」とただ感じていただけでしたが、同じ現象が自分の故郷で実際に起きていることに気付くと、この問題についてもっと知りたいと思うようになりました。これが、私が人文地理学の研究を志したきっかけです。

Q 岡橋先生の研究室での研究内容を教えてください

A 研究室では、福建省の内陸農村を対象に、労働力がどのように移動するかについて、2つの方向から研究しました。1つは地域内から地域外への移動、つまり農村から都市への出稼ぎ労働。もう1つは地域内での移動、つまり農村内での農業からの転職です。

研究の結果、米などの販売価格の低い作物を作る農村では、もっと効率よく稼げる職を得ようと、都市に出稼ぎに行く若者が多くなることが分かりました。その結果、条件の悪い農地などが荒廃し、生産量が更に低下する傾向も見られました。

一方、野菜や果物など販売価格の

高い作物を作る農村では、大半の中年層が故郷にとどまっています。作物を販売する組織が整備され、商業やサービス業など、農業以外の職業が同じ農村内に新たに生まれたからです。つまり、商業性の高い農業を普及させれば、農家に新たな就業機会を提供でき、農業の生産性を向上させる有効な対策になるのです。

今後は、他地域の農村についても研究を進め、中国のあらゆる農村を繁栄させるような方法を見いだしたいと考えています。

Q 日本の高校生へのメッセージをお願いします

A 岡橋先生の研究室に来た当初、私は一面的にしか物事を

考えられていませんでした。しかし、岡橋先生や研究室の先輩方、学外の研究者にもレポートや論文を読んでもらう、研究の内容や方法について批評していただくうちに、視野が広がって、さまざまな角度から物事を客観的に分析できるようになりました。だからこそ、労働力の移動を2つの方向から分析しようと考え付いたのだと思います。

他者との交流は、異なる価値観と出合い、自分の発想を豊かにするきっかけになります。皆さんも、クラスや学年の枠、更には学校の枠をも超えて、多くの人と話し、意見を交わしてください。機会があれば、留学して文化を異にする人々と触れ合うのもよいと思います。

私の高校時代

人見知りを克服できた英語での話し合い活動

●私の高校には、「英語コーナー」という生徒の自主活動がありました。1～3年生の有志が、週3回、放課後に集まり、英会話を楽しむ活動です。

私は英会話力を向上させようと毎回参加していましたが、初めての参加者も毎回いました。人見知りする私は、しばらくは同学年のよく知っている友だちとばかり話していましたが、参加を続けているうちに、初対面の先輩や後輩とも話ができるようになりました。知らない者同士であれば、自分だけでなく相手も緊張している。そのことに気付いた私は、相手を気遣い、自分から話し掛けられるようになったのです。人見知りを克服できたと、身をもって感じました。

見知らぬ人とも気後れせずにコミュニケーションが取れるようになったことは、今、研究者として初めての地を訪れてフィールドワークを行う上で、とても役立っています。

*プロフィールは2014年3月時点のものです